ネット投票の問題は安全性のみ。現段階ではサーバーの能力は十分な実用レベルに達しているのだといいます。まずは電子投票を普及させてからネットへ移行するという方法も考えられているのです。

いずれにしても棄権せず、投票いたしましょう❢

気に入ったものを書き写す

読売夕刊　いま風 2/12

2020 年、自身２回目の芥川賞候補となった乗代雄介さん。小説や歌詞など気に入ったものを何でもノートに書き写し、それが「個性」を考える練習になるというのです。「書く」という作業が生活から遠のいています。筆者もパソコンやスマホを使うようになって文章を「書く」ではなく「打つ」に変わりました。これでいいのか？と思っていたところ何でも書き写す乗代手法に出会いました。「書く」と「打つ」では脳の働きに違いがあるのでは…。どう思いますか？

※読売オンラインはとても便利❢ぜひ読者会員にご登録ください❢

ドラゴンへの階段　第㉒回

《エッセイ版》

「心技体の磨き方⑧～痒いところに手が届かない」

佐藤　洋祐

皆様、こんにちは！１月末には日差しの角度が変わりました。そして今、２月中旬には大気にエネルギーが溢れてきたことを感じています。力漲（みなぎ）る春がすぐそこ。

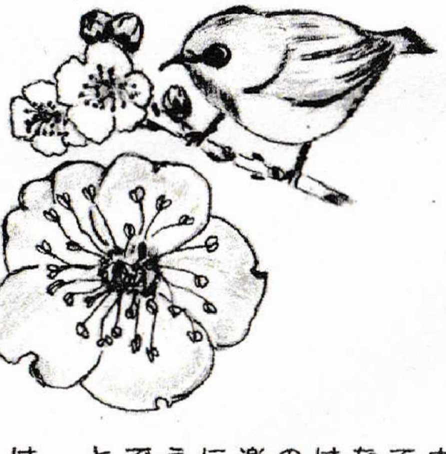
さて、数回にわたる「心技体を磨く」についてのお話し、前回は、聴き手と演奏者との音を通じた感受性のやりとりこそ音楽の醍醐味、というお話しをしました。ではそれを成すために、演奏者に求められることについて考えてみたいと思いますが、未熟な私には難しすぎるテーマですので、私の尊敬する先人の言葉から引用させていただきます。

１６世紀の武道の達人、伊藤一刀斎が師との立ち合いに完勝したのち、感嘆しきりの師の問いにこのように答えたそうです。「人は足がかゆいのに頭を掻くことはない。眠っていても足を掻く。師がわたしを打とうとすれば、それがわたしの心に映る。ただそれに応じただけです。」

「己（おのれ）」が師を打ち負かしたのではなく、こちらを打ち負かそうという師の心の動きを感じ取り、ただそれに応じた、ということ。師の心に生じた動きが、実際の肉体的な動作に移る以前に、一刀斎はその心の動きを感じ取り、ただ痒いところに手を伸ばしたということです。

まず驚くべきは、なんという感受性でしょう。しかも試合、立ち合いという非常の場に会って、「己」がどうしようか、どんな技をどのような手順で繰り出そうかということにとらわれず、１００パーセント「あなた」に集中しているこの心の強さ、静かさにも感動します。

そして、ここが私が今回触れさせていただきたいことなのですが、ただ単に「痒いところに手を伸ばす」ことが、ある一定のルールの中で生きてきた私たちに、いえ、私にとっていかに難しい事か、ということです。



音楽、サックスの演奏でいえば、私が音を出すときに例えば、「さて、次のこの小節はこのような伴奏がされるはずだから、それに対して私はこの音を吹くと、このようなハーモニーとリズムを生み出すだろう。それでは吹くぞ、エイッ！」という心の有り様で吹いてしまっていることが、いかに多いか！これはあたかも、人体図鑑を見ながら、「こういう状況だと痒くなるのは脚のスネというところだ、ではスネは図鑑でここにあるから、さあ、自分の体ではスネは、ここだ、さあ、掻こう、エイッ！」というような具合です、トホホ。これでは、一刀斎に打ち負かされるのも当たり前、いえ、そんな遠い昔話ではなく、今身近に生きる動物たち、お隣の庭木にやってくる小鳥たちにだって、簡単にやられそう。

私は、「音楽道」を進むことで心技体を磨き続けていきたい、それはただ単に一定のルールの中で繰り広げられる「たしなみ」としての音楽でなく、生きる中でどのような状況にあっても音楽と共にあり続け、よりよく生きていきたいと願うものです。それであれば、私は自分の音楽を、一刀斎が剣の道でそうしたように、小鳥たちが花の蜜を吸うためにそうしているように、「無意識」に音を奏でられるようになりたいのです。もっともっと、無意識に。

このように思わせてくれるのは、やはりライヴァルであったり、先輩であったり、仲間であったり、動物など周りの生き物たちの存在。やはり人間って、一人で生きていないですね。嬉しいものです。

佐藤　洋祐（サトウ　ヨウスケ）ジャズミュージシャン。サックス奏者としてグラミー賞を２度受賞、ノミネートは４度。海外での活躍で世界的に高い評価を得た。その後２０１５年末千葉県に住まいを移し現在に至る。２０１９年よりシンガーとしても活動を開始。

挿絵　ＴＡＫＡＫＯ